5. 太鼓台の歴史年表

区分	年号	主な出来事（青字は四国外の関連事項）
文化・文政	1717(享保 2)	姫路市 松原村屋台(神輿屋根型太鼓台をいう)を、船大工と大工が協力して造った。(姫路市・粕谷宗関氏資料)
	1728(享保 13)	姫路市「神輿太鼓」の登場。行列は古いものを先とした。(同上・粕谷氏資料) (参考)太鼓台のことを〝神輿太鼓〟と表記した古文書類は各地にある。
	1789(寛政元)	伊予三島で太鼓台新調時の寄付記録『神輿太鼓扣(ひかえ)覚帳』が現存する。 「ちゃうさ太鼓、寛政元酉(とり)ノ年始(始まる)…」⇒享和 2 年(1802)に書かれた大野原八幡神社『御神事行烈次第』の中に記載。 (現時点、四国地方における太鼓台史料の初見)
	1798(寛政 10)	大阪・難波神社の蒲団型太鼓台が『播津名所図会』に描かれた。
	1801(享和元)	南町と近木町の太鼓台が喧嘩した。(貝塚市の資料から)
	1802(享和 2)	倉敷市玉島「丸山千歳楽」(現、五楽会の千歳楽)の太鼓に銘あり。『玉島千歳楽誌』(玉島千歳楽誌編集委員会・編著)
	1805(文化 2)	伊吹島東部(下若)太鼓台の道具箱(＝蒲団枠入れ)が現存する。
	1806(文化 3)	川之江八幡神社の祭礼に 5 台の「神輿太鼓」(中須町・川原町・浦町・西浜・裏ノ丁)が奉納された。⇒川之江村大庄屋『役用記』 琴平・大芝居より出火、大芝居残らず焼失。⇒『金毘羅庶民信仰資料集・年表編』
	1808(文化 5)	太鼓台新調の記録『太鼓寄録帳』が現存する。(伊吹島・上若＝西部太鼓台)
	1809(文化 6)	「近年は、ちやうさ太鼓杯も御座候て、物入も多く…」この頃、子供ちょうさ所有の記録も窺える。⇒庄屋関連文書(観音寺・三号酒太鼓台)
	1812(文化 9)	小豆島町池田『亀山八幡宮祭礼絵馬』に、蒲団の厚みが薄く、色違い 3 枚蒲団の太鼓台が 5 台描かれた。
	1813(文化 10)	琴平・大井祭礼に、(輿太鼓)横町・金山(寺か？)町・札之前町・片原町、(獅子)西山、(練り物)内町、登場。⇒『金毘羅庶民信仰資料集・年表編』
	1814(文化 11)	大井祭礼に、(丁佐)金山寺・札之前、(獅子)西山・高藪・谷町が出た。⇒『金毘羅庶民信仰資料集・年表編』
	1820(文政 3)	伊予三島の絵師、「ミコシ太コ」(神輿太鼓)の下絵にボタンと雲龍を描く。⇒　『今村道之進日記』 加古川市 神吉八幡神社の『御神事絵巻』に素朴な蒲団型太鼓台。 呉市豊町沖友の櫓に、「水引幕箱」が現存する。(大坂・三井呉服店の納入) 倉敷市玉島乙島の中山千歳楽(ｾﾝﾀﾞｲﾛｸ＝太鼓台)が伊予からの中古購入と伝わる。⇒『玉島千歳楽誌』
	1822(文政 5)	新居浜太鼓台の初見(東町太鼓) ⇒『船大工仲間永代までの諸覚帳』
	1823(文政 6)	伊吹島の南部太鼓蔵に「太鼓水引箱」が現存する。 観音寺・酒太鼓台の「雲板箱」が現存する。(縦 × 横サイズ・凡そ 107×40cm。当時の雲板は、今の口型ではなく、4 面分解のタイプ？)
	1827(文政 10)	神輿太鼓の華美な飾り物を禁じた。⇒『一宮神社年代記録』(新居浜) シーボルト編纂・刊行の『日本』に、この頃の長崎・諏訪神社奉納「コッコデショ」が紹介される。
	1833(天保 4)	伊吹島に『太鼓帳』が現存する。(中若＝南部太鼓台) 新居浜市大島(新居浜市沖の伊予大島)中之町に『太鼓入用帖』が現存する。
	1834(天保 5)	大工資料に「富田村太鼓臺」の記載あり。⇒現時点、文献上の「太鼓台」初見 …『故郷に神の華あり』(粕谷宗関氏著 P442)
	1835(天保 6)	三好市・馬路太鼓台に道具箱が現存。(「高欄廻縫入箱」「衣装水引・天蒲団入箱 辻若中」…大野原町辻か？)
	1836(天保 7)	「神輿太鼓舁(かき)之者共、是又法外の筋、有之様…」⇒　『丸亀藩御触書控』
	1837(天保 8)	「神輿楽車」(みこし)造作の詳細記録が『西條花見日記』にあり。また、東予各地の「神輿太鼓」が多数記載された『西條誌』の編纂開始。
	1837(天保 8)頃	西条祭りの様子が描かれた『伊曾乃祭礼細見図』が現存。⇒ 東京国立博物館蔵(『西条祭礼絵巻』福原敏男著)
	1838(天保 9)	琴平〝金山寺町界隈大火〟あり。略図面に、「白川屋・縫」(屋)と、すぐ前に「高木屋」の表記があり。⇒『金光院日帳』(4 月 11 日の条)
	1841(天保 12)	兵庫県太子町・黒岡神社『祭礼絵馬』に、神輿屋根の屋台が複数台描かれた。
	1842(天保 13)	「…神輿太鼓、二三十年来はやし来候へども、当年より無用…」⇒　『琴平御用留』 「…地車(だんじり)并(ならびに)太鼓或は練物等、賑敷致候て可然…」⇒昭和 5 年発刊の『堺市史』に記載。
	1845(弘化 2)	山本町・西側(現・山本西太鼓台)若連中の『割帳』(太鼓台が制作された際の記録)が現存する。 太鼓台の金綱とその保管箱が現存。(観音寺・三号酒太鼓台)
	1850(嘉永年間)	小豆島内海町で太鼓台の喧嘩記録あり。⇒『内海町史年表』
	1853(嘉永 6)	小豆島で担がれていた太鼓台が、岡山県牛窓町本町に伝えられ、現存する。
	1854(嘉永 7)	観音寺市・古川東太鼓台(合併・廃絶)の古い太鼓内部に、「嘉永七 太鼓張替」の記載がある。胴内十字の針金に寛永通宝 20 枚が付随。
	1856(安政 3)	伊吹島下若(東部太鼓台)拵え直し。⇒『太鼓寄録帳』…新調見積り時の〝(粗)図面〟が、見積り文書と共に伝わる(大坂製) 岡山県高梁市・下町千歳楽の再建が、太鼓の胴に記載あり。(高梁市郷土資料館)
	1857(安政 4)	伊吹島上若(西部太鼓台)拵え直し。⇒『太鼓寄録帳』
	1858(安政 5)	豊浜町関谷太鼓台の道具箱が、大野原町田野々太鼓台にて確認。 「狂戯(ニワカ)、棚輿(チョウサ)、棚車(ダンジリ)ナドの類は諸国にあることながら、処々にあり…」⇒『西讃府誌』 徳島県三好市山城町大月の太鼓台の蒲団枠の刺繍裏に「安政五年」の書き込みあり。
明治	1870(明治 3)	呉市豊町大長・櫓(太鼓台)に、「恵具知若中」と記載された道具箱の蓋書きが現存する。(新居浜の旧・江口太鼓台か)
	1871(明治 4)	まんのう町・木ノ崎太鼓台に掛蒲団と 掛蒲団箱が、現役で使用されている。箱に〝小立若連中〟(観音寺市原町小立か)の記載あり。
	1875(明治 8)	この頃の太鼓台一式が詫間町箱にて伝承。箱浦屋台は、この地方の「明治期の基準太鼓台」として、香川県立ミュージアムへ寄贈された。
	1879(明治 12)	豊中町・福岡太鼓台に「明治十二年・本太鼓」記載の掛蒲団箱あり。この年の帯幅の狭い蒲団〆が、観音寺市柞田町・黒渕太鼓台で現存。
	1880(明治 13)	山本町・大辻太鼓台の昼提灯が琴平・松里庵・高木縫師にて制作された。「遊獅子親子狂昼釣箱」が現存する。
	1882(明治 15)	三好市山城町・大月太鼓台に、この年に作られたと思われる蒲団〆と水引幕が現存する。
	1890(明治 23)	大月太鼓台の昼提灯が新調された。(観音寺から購入と伝わる) 三好市・西山太鼓台にて、昼雪洞(ぼんぼり)が川人茂太郎縫師に作られる。(大月の昼提灯と図柄が同一)
	1902(明治 35)頃	この頃、松里庵・高木刺繍店が、琴平より観音寺へ工房移転か。西讃・東予各地太鼓台の大型化・豪華に拍車がかかる。

(確認・判明済みのみ記載)